

## 対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の 作成と妥当性の検討<sup>1), 2)</sup>

高比良美詠子（お茶の水女子大学人間文化研究科・日本学術振興会特別研究員）

Construction of a scale of life events in interpersonal and achievement domains for undergraduate students

Mieko TAKAHIRA (*Department of Human Culture, Ochanomizu University and Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science*)

A scale was developed to assess undergraduate students' negative and positive events in interpersonal and achievement domains. Two studies were conducted for assessing validity of this scale. In Study 1, in which 279 female subjects participated, correlations between the scores of life event scale and those of two other scales assessing depression (SDS) and subjective well-being were examined. In Study 2, in which 94 male and 108 female subjects participated, correlations between the scores of life event scale and those of two other scales assessing depression (BDI) and self-esteem were examined. Result of these studies showed high construct validity of life event scale. In addition to the 119-item full version of scale, its 60-item short version was presented.

Key words: life events, scale development, depression, well-being

キーワード: ライフイベント、尺度作成、抑鬱、ウェルビーイング

現在提案されている抑鬱の認知理論には、個人が示す抑鬱に対する認知的素因、または被損傷性(vulnerability)と、個人が実際に経験するネガティブライフイベント(ストレッサー)の相互作用により、抑鬱が生起するという「素因—ストレスモデル」を仮定しているものが多い(e.g., Abramson, Alloy, & Metalsky, 1989; Beck & Rush, 1978; Brown & Harris, 1978)。これらの理論では、抑鬱が生起するには、素因とストレッサーの内容領域の一致が重要であることが示唆されている。例えば、Abramson *et al.* (1989) は、抑鬱のホープレスネス理論の中で、認知的素因(e.g., 帰属スタイル)とストレッサーの内容領域(対人あるいは達成)が一致しているとき、素因—ストレスの相互作用は、より一層強まるという一致仮説を提案している。

素因とストレッサーの領域の一致が、抑鬱の生起にとって重要であるということは、多くの研究者によっ

て指摘されてきたことである。例えば、Beck (1983) は、人との相互作用に対して敏感な「対人志向性(sociotropy)」の高い人と、目標の達成などに対して敏感な「自律性(autonomy)」の高い人とは、ストレスを感じるイベントが異なっていると述べている。また、これと同様の指摘が、Blatt, D'Affitti, & Quinlan (1976) などによっても行われている。

そして、このような一致仮説を検討するために、認知的素因を対人・達成領域別に測定して、同じく領域別に測定したライフイベントとの相互作用を検討するという研究が実際に行われてきている。例えば、個人の持つ「対人志向性—自律性」を抑鬱の認知的素因とし、自己報告されたストレッサーとの相互作用を検討した一連の研究がある。その結果、対人志向性の高い人(対人問題に対し被損傷性を示す人)は、対人関連のライフイベントを経験したときにだけ抑鬱の悪化を示していた(Lakey & Ross, 1994; Robins & Block, 1988)。また、自律性の高い人(達成問題に対し被損傷性を示す人)は、達成関連のライフイベントを経験したときにだけ抑鬱の悪化を示したという結果も得られている(Segal, Shaw, Vella, & Katz, 1992)。

なお、これらの研究では、認知的素因とストレッサーを測定する方法として、自己評定式の質問紙が主に使用されている。そして、認知的素因の測定には、一般に、あらかじめ領域別の測定を行えるように考えて作られた尺度が用いられている。しかし、ストレッサーを測定す

1) 本研究は、日本社会心理学会第37回大会において発表されたものである。また、本研究は、文部省科学研究費補助金(番号408)の援助を受けて行われた。

2) 本論文の作成にあたり、ご指導いただきました、お茶の水女子大学坂元章先生、青山女子短期大学工藤恵理子先生に心より感謝申し上げます。また、本研究の実施にあたりご協力いただきました埼玉大学波多野和彦先生、東洋大学大島尚先生、東洋大学久保ゆかり先生、東洋大学中里至正先生、日本学術振興会(お茶の水女子大学)森津太子先生に心よりお礼申し上げます。

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

る尺度に関しては、領域別の測定を可能にするような尺度が特に使われているわけではない。むしろ、研究者は、元来領域別の測定を目的としていない尺度を使用して、それを事後的に、対人・達成領域に分類していることが多い（*e.g.*, Segal *et al.*, 1992）。しかし、この方法では、分類基準が研究者間で変動することになり、研究の一般化が難しくなる。また、既存のライフイベント尺度は、対人・達成領域で起こるライフイベントを中心に項目を収集しているわけではないので、両領域のライフイベントを重点的にとらえるのに必ずしも適した内容にはなっていない。

この問題に対処する1つの方法としては、項目が対人・達成領域別にあらかじめ分類され、領域別の測定を目的としているようなライフイベント尺度を用いることが考えられる。しかし、現在、その目的にかなう適切な尺度がみあたらない。そこで、本研究では、対人・達成領域別にライフイベントを測定する尺度を作成し、その妥当性を検討することを第1の目的とした。

また、本研究では、ポジティブライフイベントに関しても測定可能な尺度を作成し、その妥当性を検討することを第2の目的とした。これは、日本のライフイベント尺度の多くが、ネガティブライフイベントの測定を中心としており（*e.g.*, 尾関, 1993）、ポジティブライフイベントの測定に重点を置いていないためである。抑鬱の生起に関する研究で、ポジティブライフイベントの影響を考慮にいれている研究は少ないが、Needle & Abramson (1990) は、抑鬱からの回復にポジティブライフイベントが影響していることを示した。また、Lewinsohn は、抑鬱に対するポジティブライフイベントの役割を検討した一連の研究において、非抑鬱ムードとポジティブライフイベント数の間に有意な相関を報告している（*e.g.*, Lewinsohn & Libet, 1972）。このため、今後の研究の進展に伴い、ポジティブライフイベントを測定する尺度の必要性も増してくると思われる。

なお、人が生涯で経験するライフイベントは、年齢やおかれている環境などによって大きく異なると考えられる。そこで今回は、対象を日本の大学生に限定し、彼らが日常生活の中で経験すると思われるネガティブ・ポジティブライフイベントを特に収集した。

### 項目の収集と分類

#### 項目の収集

本研究では、日本の大学生が日常生活の中で経験すると思われるライフイベントを集めるために、以下の手順で項目を収集した。

まず、日本の大学生の一般的なライフイベントを測定する尺度（久田・丹羽, 1990; 尾関, 1990, 1993）を参考にネガティブライフイベント項目を収集した。ただ

し、既存の尺度は、達成領域に関連する項目が対人領域に関連する項目に比べて少なかったため、特に達成領域に関連する項目を新たに加えた。また、海外のライフイベント尺度（Saxe & Abramson, 1987）も、日本では不适当と思われる項目を除外した上で参考とした。ポジティブライフイベント項目に関しては、Needles & Abramson (1990) の手法に習い、ネガティブライフイベントと同じ領域のトピックを多く採用した（*e.g.*, 「試験、レポートで悪い成績をとった」*vs.* 「試験、レポートでよい成績をとった」）。また、久田・丹羽 (1990) の尺度項目なども参考にした。

次に、以上の方法で集めた78項目（ネガティブライフイベント41項目、ポジティブライフイベント37項目）をお茶の水女子大学の女子学生75名に配布し、過去3カ月の間にそれらの項目を体験したかどうかについて尋ねた。そして、ここで得られた体験率を参考に項目の整理・削除を行い、計69項目（ネガティブライフイベント37項目、ポジティブライフイベント32項目）をライフイベント尺度の項目として採用した。

また、それと平行して、自由記述による項目の収集も行った。お茶の水女子大学の女子学生26名に、自分が「つらい、悲しい、苦しい、嫌だ」と感じる出来事と、「うれしい、楽しい、幸せだ、好きだ」と感じる出来事を、思いっただけ自由に記述してもらった。ここで得られた1人あたりの平均記述数は、ネガティブな（つらい、悲しい、苦しい、嫌な）出来事が5.54個、ポジティブな（うれしい、楽しい、幸せな、好きな）出来事が7.81個であった。続いて、これらの記述を整理・分類し、特に対人・達成領域に関連すると思われる項目を、ライフイベント尺度の項目として採用した。この自由記述により新たに採用した項目は50項目（ネガティブライフイベント29項目、ポジティブライフイベント21項目）であった。

以上の方法により収集されたライフイベント尺度の項目数は、最終的に119項目（ネガティブライフイベント66項目、ポジティブライフイベント53項目）となった。なお、各項目を尺度に採用する際、お茶の水女子大学大学院の博士課程在籍者（心理学専攻）1名が、表現のわかりやすさについてのチェックを行った。

#### 項目の分類

お茶の水女子大学の大学院生（心理学専攻）20名に、ライフイベント尺度の各項目（計119項目）を、以下の基準で分類するよう求めた。分類は、個人的にどう思うかではなく、「客観的（一般的）にみてどうか」を基準に行うよう求めた。

**ネガティブ・ポジティブの分類** ライフイベント119項目に対し、「非常にポジティブな出来事である(1)」～「非常にネガティブな出来事である(9)」の9件法で回答

を求めた。そして、評定値の平均が5以上の項目を「ネガティブライフイベント項目（以下NLE）」、5未満の項目を「ポジティブライフイベント項目（以下PLE）」としたところ、119項目中、NLE項目が66項目、PLE項目が53項目となった。

**領域（達成・対人・両関連・無関連）の分類** ライフイベント119項目に対し、「対人問題（人とつながりを持つこと、あるいは人に受け入れてもらうこと）」との関連性と、「達成問題（目標を達成すること、あるいは目標に向かって行動すること）」との関連性を、それぞれ、「全く関連していない(0)」～「非常に関連している(7)」の8件法で評定するよう求めた。なお、この対人・達成の分類は、Beck (1983) の分類を参考にした。そして、対人問題との関連性が3.5以上で、達成問題との関連性が3.5未満の項目を「対人項目」、対人問題との関連性が3.5未満で、達成問題との関連性が3.5以上の項目を「達成項目」、対人問題との関連性と達成問題との関連性の両方が3.5以上の項目を「両関連項目」、対人問題との関連性と達成問題との関連性の両方が3.5未満の項目を「無関連項目」としたところ、ネガティブイベント（66項目）では、対人25項目、達成19項目、両関連13項目、無関連9項目となり、ポジティブイベント（53項目）では、対人19項目、達成20項目、両関連7項目、無関連7項目となった。

## 調 査 1

### 目的

調査1の目的は、完成した「達成・対人領域別ライフイベント尺度」の妥当性を検討することである<sup>3)</sup>。なお今回は、妥当性を検討する方法として、2種類の尺度（SDS、人生に対する肯定的評価尺度）との相関を求めた。

SDS（自己評定式抑鬱尺度）は、個人の抑鬱傾向を測定する尺度である。NLEは抑鬱の悪化に、PLEは抑鬱の改善に、それぞれ寄与すると考えられているため、NLEとSDSの間には正の相関、PLEとSDSの間には負の相関がみられると予想される。

人生に対する肯定的評価尺度は、ある程度の時間的安定性・状況一貫性を持った、個人の知覚された幸福感 (subjective well-being) を測定する尺度である。NLEは幸福感の低下に、PLEは幸福感の上昇にそれぞれ寄与すると考えられるため、NLEと人生に対する肯定的

3) 信頼性の検討のためには、一般に、時間的な一貫性や、項目間の一貫性の仮定が必要である。しかし、尺度の性質上、本尺度ではそうした仮定ができないため、信頼性の検討も独立した形では行っていない。ただし、高い妥当性が示されれば、あわせて高い信頼性が示されることになるので、本研究ではそうした形で尺度の信頼性を検討しているといえる。

評価尺度の間には負の相関、PLEと人生に対する肯定的評価尺度の間には正の相関がみられると予想される。

### 方法

**被験者** お茶の水女子大学大学生162名、埼玉大学大学生64名、日本女子大学大学生53名、計279名に調査の協力を求めた。なお、日本女子大学の学生には、達成・対人領域別ライフイベント尺度と、SDSのみを施行した。有効回答者数はSDSが276名、肯定的評価尺度が215名であった。

**質問紙** ①達成・対人領域別ライフイベント尺度：達成・対人領域のライフイベントを中心に構成された119項目からなる尺度。自分に起こったネガティブ・ポジティブライフイベントを領域別に測定する。回答は、その出来事を過去3カ月の間に「経験した」「経験しない」の2件法で求めた。可能な得点の範囲は、NLEでは0-66点、PLEでは0-53点である。得点が高いほど、ネガティブ・ポジティブイベントを多く経験しているとみなされる。②SDS: Self-rating Depression Scale (Zung, 1965) の福田・小林(1973)による日本語版。得点が高いほど、抑鬱度が高いと判断される。③人生に対する肯定的評価尺度: the Satisfaction With Life Scale (SWLS; Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) の、角野(1995)による拡張版。得点が高いほど、自分の人生に満足を感じているとみなされる。

**手続き** 上記の尺度を1組にして配布し、回答を求めた。調査は1995年6月に実施した。

### 結果と考察

**ライフイベント尺度の各項目の体験率** Table1に、各項目の内容および体験率を示した。NLEでは体験率が90%以上の項目が存在しなかったのに比べ、PLEでは、3項目で90%を超える体験率が報告された。反対に、NLEでは、体験率が10%以下の項目が12項目あったが、PLEでは2項目だけだった。なお、NLEで体験率が比較的高かった(70%以上)のは、「進行中の仕事(勉強)と関係のないことに時間をとられた」「やらなければならない課題(レポートなど)がたくさんあった」「課題(試験やレポートなど)が大変な授業を受けるようになった」など、大学生に特有の達成(学業)領域に関連した項目だった。それに比べ、PLEでは、すべての領域で70%以上の体験率が報告されていた(対人5項目、達成3項目、両関連2項目、無関連2項目)。つづいて、ライフイベント尺度の得点の分布をFig.1に、平均値と標準偏差をTable2に示した。これを見ても、PLEの体験数が、NLEより全体的に多く報告されていることがわかる。これらのことから、PLEは、NLEに比べ、女子大学生が日常的に体験しやすい項目を多く含んでいたと考えられる。

**NLEと他の尺度(SDS、人生に対する肯定的評価尺**

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

Table 1 各項目の体験率

①NLE—対人		体験率 (%)
1	家族、親しい親戚、友人、恋人などが死亡した。	6.1
2*	人から無視された。	12.2
3	信頼していた人に裏切られた。	7.9
4*	友人、恋人との関係がダメになった。	9.7
5	陰で悪口をいわれた。	7.5
6*	家族、友人、恋人などを傷つけてしまった。	38.0
7*	友人や仲間から批判されたり、からかわれたりした。	31.9
8*	人から誤解された。	37.6
9*	家族との折り合いが悪い。	15.8
10*	家族、または親しい親戚の誰かが、病気やケガをした。	22.9
11*	約束を破られた。	15.8
12*	親しい友人、または恋人が、病気やケガをした。	22.6
13*	家族、友人、恋人などと、けんか、口論をした。	42.7
14	いやな人から交際をせまられた。	13.3
15	家族、友人、恋人などの悪口を言われた。	12.2
16*	仲間の話題についていけなかった。	41.6
17	一緒に楽しめる友人が減った。	7.5
18*	仲間との旅行、遊びの計画が潰れた。	41.2
19*	家族、友人、恋人、などに、自分の欠点を指摘された（または、注意された）。	51.6
20	友人、恋人などが、遠くへ引っ越した。	18.6
21*	家族、親戚内でのトラブルを耳にした（あるいは、それに巻き込まれた）。	26.9
22*	会話に困った。	66.7
23	1人暮らしで、他人との接触が少ない。	19.0
24	気の合わない人（嫌いな人）と話しをした。	59.9
25	友人の悩みやトラブルに関わりを持った。	55.9
②NLE—達成		
1	就職に関連したことで挫折を味わった。	3.9
2	仕事（アルバイト）先を解雇された。	2.5
3*	自分の勉強、研究、卒業などがうまく進まなかった。	47.7
4*	授業中、先生の質問にほとんど答えることができなかった。	18.3
5*	授業についていけなくなった。	29.4
6*	課題（レポートなど）が期日までに終わらなかった。	7.5
7*	試験、レポートで悪い成績をとった。	11.5
8*	課題（レポート、発表など）の出来が、自分では納得のいかないものだった。	50.5
9*	望んでいた仕事（アルバイト）につけなかった。	28.0
10*	現在専攻している（あるいは専攻しようとしている）研究分野への興味が失せた。	14.0
11*	仕事（アルバイト）が見つからなかった。	35.1
12*	進行中の仕事（勉強）と関係のないことに時間をとられた。	77.4
13*	趣味や習い事が、思うように上達しなかった。	41.2
14*	現在所属している大学自体に不満を持った。	30.5
15*	無駄なことに時間を費やした。	63.4
16*	やらなければならない課題（レポートなど）がたくさんあった。	75.6
17*	興味の持てない授業を受けるようになった。	64.9
18	課題（試験やレポートなど）が大変な授業を受けるようになった。	70.6
19	習い事や趣味を辞めた。	5.0
③NLE—両関連		
1	授業での発表を、先生や仲間になされた。	2.2
2	仕事（アルバイト）先での働きについて低い評価を受けた。	13.3
3	両親、先生、先輩などに叱られた。	24.4

## 社会心理学研究 第14巻第1号

Table 1 つづき

③NLE—両関連		体験率(%)
4	家族、友人、恋人、先生などの期待にこたえられなかった。	34.4
5	自分の顔やスタイルをけなされた。	19.4
6	恋人を家族に認めてもらえない(あるいはもらえそうもない)。	7.5
7	恋人が欲しいのにできない。	37.6
8	自分の意見が、思うようにいえなかった。	62.7
9	ある異性の関心を引こうとしたが、うまくいかなかった。	12.5
10	相手を説得できなかった(または、自分の意見に納得してもらえなかった)。	36.6
11	能力、容姿などを、人と比較された。	35.1
12	クラブやサークルの活動内容に不満を持った。	52.3
13	自分が望むより、恋人とのデート回数が少なかった。	19.4
④NLE—無関連		
1	災害や事故にあった(大雨、火事、交通事故など)。	5.4
2	痴漢にあった、あるいは襲われそうになった。	30.8
3	からだの調子が悪くなった(病気、ケガを含む)。	48.7
4	大切なものを壊したり、なくしたりした。	26.2
5	法律にふれるような行為をして捕まった(交通違反やキセルを含む)。	10.0
6	経済状態が悪化した(バイト料が少なかった、予期しない出費があったなども含む)。	63.1
7	十分な睡眠がとれなかった。	59.1
8	通学時間が増えた。	31.2
9	暇を持て余した。	35.1
⑤PLE—対人		
1*	人から信頼された。	68.1
2	恋人ができた。	9.7
3	家族、友人、恋人などと仲直りした。	24.4
4*	一緒に楽しめる友人が増えた。	79.9
5*	気の合う仲間と旅行、遊びにいった。	66.7
6*	好みの異性に関心をもたれた(または、話をした)。	40.9
7*	恋人が優しくしてくれた。	30.8
8*	思いがけなくプレゼントをもらった。	40.1
9*	人にあげたプレゼントが喜ばれた。	56.3
10*	人から理解された。	59.5
11*	恋人とデートをした。	32.3
12	恋人との間にあった問題が片づいた。	10.0
13*	家族と楽しく過ごす時間が増えた。	22.6
14	家族内のごたごたが解決した。	15.1
15*	家族、友人、恋人、先生などに助けてもらった。	73.1
16*	仲間とのおしゃべりを楽しんだ。	94.6
17*	家族、友人、恋人から電話があった。	93.2
18*	なつかしい人から連絡(手紙、電話など)をもらった。	77.4
19*	旧友と偶然再会した。	46.6
⑥PLE—達成		
1*	自分のたてた計画が、予定通りに進んだ。	55.9
2	就職に関連したことが、望みどおりに進んだ。	2.5
3*	試験、レポートでよい成績をとった。	25.4
4*	自分の勉強、研究、卒業などが思いどおりに進んだ。	22.9
5*	余計なことにわずらわされず、仕事(勉強)に集中できた。	24.0
6*	前から欲しかったものが手に入った。	57.7
7*	現在専攻している(あるいは専攻しようとしている)研究分野への興味がわいた。	67.7

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

⑥PLE—達成	体験率 (%)
8* 名案が浮かんだ。	28.0
9* いい映画を見た（または、いい本を読んだ、いい音楽を聞いたなど）。	81.7
10* 気に入った（あるいは得な）買い物をした。	75.6
11* 望んでいた仕事（アルバイト）につけた。	33.7
12* 授業中、先生の質問にきちんと答えられた。	29.7
13* 新しいことに興味を持った。	61.3
14* 興味深い授業を受けるようになった。	68.5
15* 自分の勉強、研究などに必要なものが手に入った。	40.1
16* 趣味や習い事の腕があがった。	25.4
17 授業内容をよく理解できた。	57.0
18 課題（レポートなど）を、期日までに提出し終えた。	82.1
19 仕事（アルバイト）先を解雇されずにすんだ。	48.0
20 習い事や趣味を始めた。	30.8

⑦PLE—両関連	体験率 (%)
1 授業での発表が、先生や仲間にもめられた。	19.7
2 友達になりたいと思っていた人と、友達になった。	66.7
3 家族、友人、恋人などの役に立てた。	65.2
4 仕事（アルバイト）先での働きについて、高い評価を受けた。	18.6
5 家族、友人、恋人、などからほめられた。	62.4
6 家族、友人、恋人などに感謝された（喜ばれた）。	70.6
7 頼まれていた用事を、無事にこなした。	71.7

⑧PLE—無関連	体験率 (%)
1 経済状態が好転した（アルバイト代が入った、臨時収入があったなども含む）。	26.9
2 からだの調子が良くなった。	25.8
3 十分に睡眠をとった。	65.6
4 おいしいものを食べた。	93.9
5 通学時間が減った。	20.1
6 ペットと遊んだ。	21.5
7 スポーツをした。	78.9

各項目は、項目分類時に、ネガティブ度（あるいはポジティブ度）が高いと評定された順に並べてある。

\*は短縮版尺度の項目。

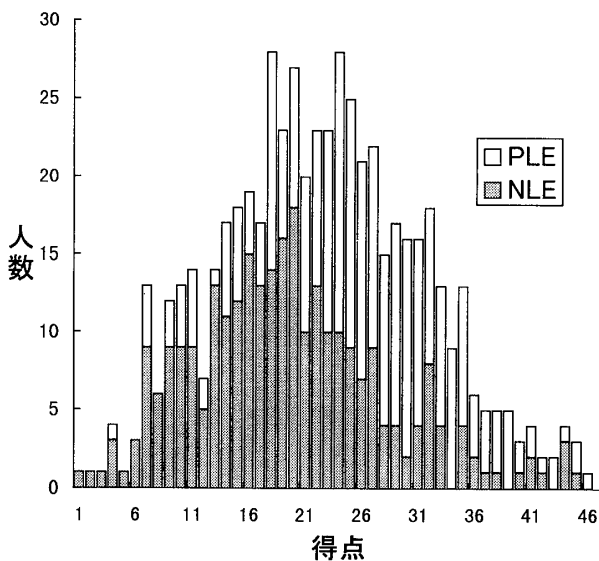


Fig. 1 ライフイベント尺度の得点分布

度)との相関 次に、ライフイベント尺度の妥当性を検討するために、NLEと他の尺度との相関を求めた (Table 3)。なお、今回の調査では、3つの大学でデータを集めたため、学校の効果を統制した偏相関係数を算出した<sup>4)</sup>。その結果、NLE全体とSDSとの間には有意な正の偏相関がみられた。各領域別（対人・達成・両関連・無関連）の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。また、NLE全体と人生に対する肯定的評価

4) なお、各領域のライフイベントと他の尺度 (SDS、人生に対する肯定的評価尺度) との相関の強さが3つの学校間で異なるかどうかを検討するために、SDS、人生に対する肯定的評価尺度をそれぞれ従属変数とし、各領域のライフイベント数を独立変数とした上で、さらに学校 (ダミー変数) × ライフイベント数を統制変数として投入する重回帰分析を付加的に行ったところ、いずれの場合も、学校 × ライフイベント数の交互作用効果は有意でなかった。

## 社会心理学研究 第14巻第1号

Table 2 ライフイベント尺度の平均値と標準偏差 (調査1)

	ネガティブライフイベント (NLE)					ポジティブライフイベント (PLE)				
	全体	対人	達成	両関連	無関連	全体	対人	達成	両関連	無関連
平均	20.37	6.93	6.77	3.57	3.10	25.67	3.32	9.18	3.75	3.33
標準偏差	(8.06)	(9.41)	(3.80)	(1.68)	(1.31)	(8.46)	(4.02)	(2.77)	(2.20)	(1.53)

$N=279$ .

Table 3 ライフイベント尺度と他の尺度との相関係数 (調査1)

	ネガティブライフイベント (NLE)					ポジティブライフイベント (PLE)				
	全体	対人	達成	両関連	無関連	全体	対人	達成	両関連	無関連
SDS	.39**	.31**	.42**	.28**	.23**	-.28**	-.17**	-.29**	-.19**	-.20**
肯定的評価	-.23**	-.16*	-.31**	-.16*	-.08	.40**	.32**	.37**	.34**	.21**

$N=276$  (SDS)、 $N=215$  (肯定的評価尺度)。すべて学校の効果を統制した偏相関係数。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

尺度との間には有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析では、無関連領域の NLE と人生に対する肯定的評価尺度との間に、有意な偏相関がみられなかったものの、本尺度の主要な領域である対人・達成領域においては、有意な負の偏相関がみられた。よって、これらの結果は、NLE の妥当性を支持するものといえる。

**PLE と他の尺度 (SDS、人生に対する肯定的評価尺度) との相関** つづいて、学校の効果を統制した、PLE と他の尺度との偏相関を求めた (Table 3)。その結果、PLE 全体と SDS との間には有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な負の偏相関がみられた。また、PLE 項目全体と人生に対する肯定的評価尺度との間には有意な正の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。これらは予測に一致する結果であり、PLE の妥当性を支持するものといえる。

以上のように、調査1の結果は、作成したライフイベント尺度の妥当性を支持するものであった。しかし、今回の調査は、被験者が女性だけに限られていたという点で問題を含んでいる。本尺度は、項目収集時にも女性被験者の協力を得ており、特に、PLE に関しては参考にできる既存の尺度が少なかったため、女性が体験しやすいものに項目が片寄っている可能性もある。そのため、結果の一般化には、男女両方の被験者を用いた更なる検討が必要であると思われる。

## 調 査 2

### 目的

調査2では、対人・達成領域別ライフイベント尺度の妥当性をさらに検討するために、調査1で用いたも

のと異なる尺度との相関を検討する。また、調査1では女性のみを被験者としていたが、調査2では、男女両方の被験者を用いる。

なお今回は、妥当性の検討のために、以下の2種類の尺度 (BDI、自尊心尺度) との相関を求めた。BDI (ベック抑鬱尺度) は、SDS とは異なる形式により、個人の抑鬱症状を測定する尺度である。NLE は抑鬱症状の悪化に、PLE は抑鬱症状の改善にそれぞれ影響すると考えられているため、NLE と BDI の間には正の相関、PLE と BDI の間には負の相関がみられると予想される。

自尊心尺度は、個人の自尊心を測定する尺度である。NLE は自尊心の低下に、PLE は自尊心の上昇にそれぞれ影響すると考えられるため、NLE と自尊心尺度の間には負の相関、PLE と尺度尺度の間には正の相関がみられると予想される。

### 方法

**被験者** 東洋大学大学生202名 (男性94名、女性108名) に調査の協力を求めた。BDI、自尊心尺度の有効回答者数は199名であった。

**質問紙** ①達成・対人領域別ライフイベント尺度: 自分に起こったネガティブ・ポジティブライフイベントを領域別に測定する尺度。得点が高いほど、ネガティブ・ポジティブライフイベントを多く経験しているとみなされる。②BDI: Beck Depression Inventory (Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979) の林・瀧本(1991)による日本語版。得点が高いほど、重度の抑鬱であるとみなされる。③自尊心尺度: Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965) の山本・松井・山成(1982)による日本語版。得点が高いほど自尊心が高いとみなされる。

**手続き** 上記の尺度を1組にして配布し、回答を求

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

めた。調査は1995年10月に実施した。

## 結果と考察

ライフイベント尺度の各項目の体験率 ライフイベント尺度の各項目の体験率を Table 4 に示した。

各項目ごとにイベントの体験率（％）に男女で差があ

Table 4 各項目の体験率（調査2）

項目	全体	男性	女性	男女差
①NLE—対人				
1	6.9	7.4	6.5	
2	15.8	14.9	16.7	
3	11.4	9.6	13.0	
4	16.8	12.8	20.4	
5	13.9	13.8	13.9	
6	35.1	29.8	39.8	
7	35.6	41.5	30.6	
8	39.1	40.4	38.0	
9	19.3	17.0	21.3	
10	18.8	14.9	22.2	
11	20.8	20.2	21.3	
12	20.8	14.9	25.9	*
13	35.1	31.9	38.0	
14	11.4	6.4	15.7	*
15	10.4	6.4	13.9	*
16	47.5	45.7	49.1	
17	8.4	8.5	8.3	
18	38.1	34.0	41.7	
19	46.5	38.3	53.7	*
20	4.5	2.1	6.5	
21	27.7	17.0	37.0	**
22	67.8	63.8	71.3	
23	11.9	14.9	9.3	
24	45.5	43.6	47.2	
25	50.5	39.4	60.2	**
②NLE—達成				
1	5.0	2.1	7.4	*
2	2.0	2.1	1.9	
3	54.0	52.1	55.6	
4	21.8	26.6	17.6	
5	35.1	35.1	35.2	
6	30.7	35.1	26.9	
7	56.9	56.4	57.4	
8	59.9	53.2	65.7	*
9	27.7	28.7	26.9	
10	18.3	24.5	13.0	*
11	30.7	36.2	25.9	
12	66.3	69.1	63.9	
13	39.6	40.4	38.9	
14	48.5	53.2	44.4	
15	63.9	60.6	66.7	
16	68.8	64.9	72.2	

Table 4 つづき

項目	全体	男性	女性	男女差
17	48.0	47.9	48.1	
18	49.5	39.4	58.3	**
19	2.0	1.1	2.8	
③NLE—両関連				
1	2.5	4.3	0.9	
2	19.8	20.2	19.4	
3	24.3	19.1	28.7	
4	33.2	33.0	33.3	
5	17.3	12.8	21.3	
6	5.0	4.3	5.6	
7	48.0	50.0	46.3	
8	58.4	48.9	66.7	**
9	21.8	24.5	19.4	
10	38.6	34.0	42.6	
11	31.7	31.9	31.5	
12	55.4	47.9	62.0	*
13	12.9	11.7	13.9	
④NLE—無関連				
1	9.4	10.6	8.3	
2	9.4	1.1	16.7	**
3	42.1	40.4	43.5	
4	26.7	23.4	29.6	
5	16.3	13.8	18.5	
6	49.0	50.0	48.1	
7	65.3	62.8	67.6	
8	7.4	8.5	6.5	
9	48.5	47.9	49.1	
⑤PLE—対人				
1	56.4	51.1	61.1	
2	13.9	11.7	15.7	
3	13.4	8.5	17.6	*
4	53.0	43.6	61.1	**
5	61.9	50.0	72.2	**
6	46.0	42.6	49.1	
7	23.3	20.2	25.9	
8	28.2	14.9	39.8	**
9	38.6	21.3	53.7	**
10	43.6	36.2	50.0	*
11	29.7	30.9	28.7	
12	10.9	9.6	12.0	
13	23.3	13.8	31.5	**
14	5.9	3.2	8.3	
15	66.3	53.2	77.8	**
16	91.6	85.1	97.2	**
17	88.6	79.8	96.3	**
18	49.0	31.9	63.9	**
19	43.1	38.3	47.2	



Table 4 つづき

項目	全体	男性	女性	男女差
⑥PLE—達人				
1	45.5	43.6	47.2	
2	3.5	3.2	3.7	
3	53.5	43.6	62.0	**
4	16.8	13.8	19.4	
5	21.8	18.1	25.0	
6	52.5	51.1	53.7	
7	43.1	30.9	53.7	**
8	27.2	26.6	27.8	
9	79.2	71.3	86.1	**
10	65.3	60.6	69.4	
11	25.2	21.3	28.7	
12	26.2	19.1	32.4	*
13	55.0	45.7	63.0	**
14	29.7	19.1	38.9	**
15	35.6	30.9	39.8	
16	20.8	25.5	16.7	
17	55.4	52.1	58.3	
18	80.7	77.7	83.3	
19	36.6	33.0	39.8	
20	15.8	12.8	18.5	
⑦PLE—両関連				
1	9.9	8.5	11.1	
2	34.7	27.7	40.7	*
3	55.4	51.1	59.3	
4	27.7	25.5	29.6	
5	45.5	34.0	55.6	**
6	54.0	38.3	67.6	**
7	51.0	48.9	52.8	
⑧PLE—無関連				
1	35.1	31.9	38.0	
2	9.4	9.6	9.3	
3	70.8	68.1	73.1	
4	70.8	56.4	83.3	**
5	10.4	14.9	6.5	*
6	30.7	24.5	36.1	*
7	73.8	72.3	75.0	

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

るかどうかを個別に検討したところ、NLEで13項目、PLEで23項目に差が見られた。なおこれらは、2項目(NLE—達成、PLE—無関連、各1項目)を除き、女性の体験率の方が男性の体験率より高かった。

ネガティブライフイベント項目において、女性の体験率が特に高かったのは「家族、親戚内でのトラブルを耳にした(あるいは、それに巻き込まれた)」「友人の悩みやトラブルに関わりを持った」「痴漢に遭った、あるい

は襲われそうになった」などであった。これは、男女別の分析を行っている久田・丹羽(1987)の結果とも一致している。

ポジティブライフイベント項目は、ネガティブライフイベント項目に比べ、全体的に男女間の体験率に差のある項目が多かった。特に対人領域において、女性の体験率の高い項目が目立った。「気の合う仲間と旅行、遊びに行った」「思いがけなくプレゼントをもらった」「人にあげたプレゼントが喜ばれた」「家族、友人、恋人、先生などに助けてもらった」「仲間とおしゃべりを楽しんだ」「家族、友人、恋人から電話があった」「なつかしい人から連絡(手紙、電話など)をもらった」など、対人領域項目の半数以上で、女性の方が男性よりも高い体験率を報告していた。

つづいて、ライフイベント尺度の領域別の平均と標準偏差をTable 5に示した。各領域別に、イベントの体験数に男女差があるかどうかを検討するための $t$ 検定を行ったところ、対人NLEで、女性の方が、有意に多くの体験を報告していた( $t(200) = -2.19, p < .05$ )。また、PLEは、全体( $t(200) = -4.83, p < .0001$ )、対人( $t(200) = -5.52, p < .0001$ )、達成( $t(200) = -3.47, p < .001$ )、両関連( $t(200) = -3.07, p < .01$ )、無関連( $t(200) = -2.35, p < .05$ )のすべての領域で、女性の方が、有意に多くの体験を報告していた。このことから、女性は男性に比べ、ポジティブライフイベントを特に多く経験していたといえる。また、女性は、男性に比べ、対人領域に分類されるようなイベントを、より多くの経験していたといえる。

NLEと他の尺度(BDI、自尊心尺度)との相関 次に、NLEと他の尺度との、性別の効果を統制した偏相関係数と、男女別の相関係数を求めた(Table 6)。NLE全体とBDIの間には有意な正の偏相関がみられた。また、NLEの各領域別(対人・達成・両関連・無関連)の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。NLE全体と自尊心尺度の間には有意な負の偏相関がみられた。NLEの各領域別の分析でも、同じく有意な負の偏相関がみられた。これらの結果は予測に一致しており、NLEの妥当性を支持するものといえる。なお、男女別にみた場合も、NLEとBDIの間には、いずれの領域でも有意な正の相関がみられた。また、NLEと自尊心尺度の間にも、女性の無関連領域を除き、有意な(あるいは有意傾向の)負の相関が得られた。

PLEと他の尺度(BDI、自尊心尺度)との相関 PLEと他の尺度の、性別の効果を統制後の偏相関係数と、男女別の相関係数を求めた(Table 6)。その結果、PLE全体とBDIの間には有意な負の偏相関がみられた。また、PLEの各領域別の分析でも、同じく有意な負の偏相関がみられた。PLE全体と自尊心との間にも有意な

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

Table 5 ライフイベント尺度の平均値と標準偏差（調査2）

		ネガティブライフイベント (NLE)					ポジティブライフイベント (PLE)				
		全体	対人	達成	両関連	無関連	全体	対人	達成	両関連	無関連
全	平均	20.32	6.60	7.20	3.69	2.74	21.55	7.87	7.90	2.78	3.01
	標準偏差	(9.91)	(4.30)	(3.38)	(2.47)	(1.58)	(8.62)	(3.62)	(3.52)	(1.95)	(1.33)
男	平均	19.19	5.89	7.29	3.43	2.59	18.57	6.46	7.00	2.34	2.78
	標準偏差	(10.05)	(4.26)	(3.67)	(2.44)	(1.53)	(8.75)	(3.59)	(3.53)	(2.07)	(1.35)
女	平均	21.30	7.21	7.29	3.92	2.88	24.15	9.09	8.68	3.17	3.21
	標準偏差	(9.74)	(4.27)	(3.13)	(2.48)	(1.62)	(7.65)	(3.19)	(3.33)	(1.75)	(1.28)

N=202 (男 94、女 108)。

Table 6 ライフイベント尺度と他の尺度との相関係数（調査2）

		ネガティブライフイベント (NLE)					ポジティブライフイベント (PLE)				
		全体	対人	達成	両関連	無関連	全体	対人	達成	両関連	無関連
BDI	全 <sup>a</sup>	.45**	.35**	.38**	.45**	.34**	-.24**	-.15*	-.24**	-.14*	-.27**
	男	.41**	.32**	.36**	.38**	.37**	-.28**	-.25*	-.19 <sup>+</sup>	-.18 <sup>+</sup>	-.35**
	女	.49**	.39**	.41**	.53**	.32**	-.19 <sup>+</sup>	-.04	-.29**	-.09	-.17 <sup>+</sup>
自尊心	全 <sup>a</sup>	-.25**	-.19**	-.26**	-.24**	-.15*	.29**	.18*	.28**	.26**	.23**
	男	-.25*	-.18 <sup>+</sup>	-.26*	-.21*	-.20 <sup>+</sup>	.31**	.25*	.27*	.25*	.27**
	女	-.26*	-.19*	-.26**	-.27**	-.11	.26**	.09	.30**	.27**	.18 <sup>+</sup>

N=199 (男 92、女 107)。<sup>a</sup>性別の効果を統制した偏相関係数。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$ 。

正の偏相関がみられた。また、PLEの各領域別の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。これらは予測どおりの結果であり、PLEの妥当性を支持するものといえる。つづいて男女別にみた場合、男性では、PLEとBDIとの間に、いずれも有意な（あるいは有意傾向の）相関が得られたが、女性の方では、対人、両関連PLEで有意な相関が得られなかった。ただし、女性被験者のみを使った調査1において、抑鬱傾向を測定するSDSと、PLEの各領域の間にいずれも有意な相関が得られているため、それほど問題はないと思われる。また、PLEと自尊心との相関は、男性では、いずれも有意な相関が得られたが、女性では、対人PLEに、有意な相関がみられなかった。女性の場合、男性と違い、対人問題でポジティブなイベントを経験しても、それが自尊心の高揚には直接結びつかないのかもしれない。

## 短縮版尺度の作成

尺度の利便性を考え、今回の2つの調査で得られたデータをもとに、ネガティブライフイベント30項目（対人15、達成15）、ポジティブライフイベント30項目（対人15、達成15）の計60項目からなる短縮版尺度を作成した（Table 1）。短縮版尺度の項目には、①項

目の分類時にネガティブ度（あるいはポジティブ度）が高いと評定されたもの、②調査2（男女両方のデータ）の項目反応率が20～80%の範囲内にあったものを採用した<sup>5)</sup>。

**体験数における男女差** 短縮版尺度の平均値と標準偏差はTable 7に示した。まず、各領域のイベントの体験数に、男女で差があるかどうかを検討するために、*t*検定を行った。その結果、対人NLEで、女性の方が、有意に多くの体験を報告していた( $t(200) = -2.08$ ,  $p < .05$ )。また、全体、対人、達成領域のPLEで、女性の方が、有意に多くの体験を報告していた( $t_s(200) = 5.20, 5.67, 3.47$ ,  $p_s < .001$ )。

**SDS、BDI、人生に対する肯定的評価尺度、自尊心尺度との相関** 短縮版尺度と、調査1、調査2で施行した各尺度との相関をTable 8に示した。学校の効果を統制して、NLE全体とSDSとの相関を検討した場合、NLE全体とSDSの間には有意な正の偏相関がみられた。各領域別（対人・達成）の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。NLE全体と肯定的評価尺度の

5) 今回提案した短縮版尺度は、対人・達成領域の項目のみを含むように作成されている。しかし、目的によっては、これらの項目に、両関連・無関連領域の項目を足して使用することも可能である。

## 社会心理学研究 第14巻第1号

Table 7 短縮版ライフイベント尺度の平均値と標準偏差

		ネガティブライフイベント (NLE)			ポジティブライフイベント (PLE)		
		全体	対人	達成	全体	対人	達成
調査 1	平均	10.80	4.85	5.95	15.80	8.82	6.98
	標準偏差	(4.97)	(3.14)	(2.65)	(5.29)	(2.87)	(3.24)
調査 2 全	平均	11.55	4.85	6.70	13.40	7.43	5.98
	標準偏差	(5.53)	(3.08)	(3.13)	(5.59)	(3.26)	(2.99)
	男 平均	11.21	4.37	6.84	11.34	6.13	5.21
	男 標準偏差	(5.74)	(3.06)	(3.40)	(5.59)	(3.29)	(2.99)
	女 平均	11.85	5.27	6.58	15.19	8.56	6.64
	女 標準偏差	(4.94)	(2.80)	(2.84)	(4.94)	(2.80)	(2.84)

調査 1  $N=279$ 、調査 2  $N=202$  (男 94、女 108)。

Table 8 短縮版ライフイベント尺度と他の尺度との相関係数

		ネガティブライフイベント (NLE)			ポジティブライフイベント (PLE)		
		全体	対人	達成	全体	対人	達成
SDS <sup>a</sup>		.44**	.32**	.44**	-.29**	-.19**	-.30**
肯定的評価 <sup>a</sup>		-.29**	-.18**	-.32**	.41**	.34**	.38**
BDI 全 <sup>b</sup>		.41**	.35**	.38**	-.23**	-.16*	-.24**
	男	.37**	.30**	.35**	-.25*	-.24*	-.19 <sup>+</sup>
	女	.46**	.42**	.41**	-.20*	-.06	-.30**
自尊心 全 <sup>b</sup>		-.27**	-.22**	-.27**	.24**	.17*	.25**
	男	-.27*	-.18 <sup>+</sup>	-.26*	.27*	.25*	.22*
	女	-.30**	-.25**	-.28**	.20*	.08	.28**

調査 1  $N=276$  (SDS)、 $N=215$  (肯定的評価)。調査 2  $N=199$  (男 92、女 107)。

<sup>a</sup>学校の効果を統制した偏相関係数。<sup>b</sup>性別の効果を統制した偏相関係数。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$ 。

間には、有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、有意な負の偏相関がみられた。性別の効果を統制したところ、NLE 全体と BDI との間には有意な正の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。また、NLE 全体と自尊心尺度の間にも有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な負の偏相関がみられた。これらの結果は予測に一致しており、短縮版 NLE の妥当性を支持するものだという。

PLE についても、PLE 全体と SDS との間には有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析でも同様に有意な負の偏相関がみられた。PLE 全体と肯定的評価尺度の間には、有意な正の偏相関がみられた。各領域別の分析でも有意な正の偏相関がみられた。PLE 全体と BDI との間にも有意な負の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な負の偏相関がみられた。また、PLE 全体と自尊心との間にも有意な正の偏相関がみられた。各領域別の分析でも、同じく有意な正の偏相関がみられた。これらは予測どおりの結果であり、短縮

版 PLE の妥当性を支持するものだという。

**BDI、自尊心尺度を従属変数とした男女別の重回帰分析** 対人・達成領域のライフイベントと性別の関係をさらに詳しく検討するために、男女両方のデータがそろっている BDI、自尊心尺度を従属変数として、短縮版尺度の下位領域 (NLE 対人・NLE 達成・PLE 対人・PLE 達成) を説明変数とした重回帰分析を男女別に行った (Table 9)。BDI を従属変数とした場合、男性では、NLE 対人と、PLE 対人が抑鬱症状の予測に有意に寄与しており、NLE 達成が抑鬱症状を有意に予測する傾向を示した。それに対して女性では、NLE 対人と、PLE 達成が抑鬱症状を有意に予測しており、NLE 達成が抑鬱症状を有意に予測する傾向がみられた。しかし、男性では、PLE 達成が、女性では、PLE 対人が、抑鬱症状を有意に予測することができなかった。

次に、自尊心尺度を基準変数とした場合、男性では、PLE 対人が自尊心を有意に予測しており、NLE 対人も自尊心を有意に予測する傾向にあった。しかし、NLE 達成と PLE 達成からは、自尊心に対する有意な寄与は

## 高比良：対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）の作成と妥当性の検討

Table 9 BDI、自尊心尺度を従属変数とした重回帰分析の標準偏回帰係数

	BDI		自尊心	
	男性	女性	男性	女性
NLE 対人	.36**	.43**	-.22 <sup>+</sup>	-.26*
NLE 達成	.21 <sup>+</sup>	.18 <sup>+</sup>	-.20	-.15
PLE 対人	-.33**	-.01	.26*	.003
PLE 達成	-.15	-.42**	.18	.36**
決定係数 (R <sup>2</sup> )	.29	.38	.20	.21

N=199 (男 92、女 107)。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$ 。

見られなかった。女性では、NLE 対人と、PLE 達成から有意な寄与がみられたが、NLE 達成と、PLE 対人からは有意な寄与はみられなかった。自尊心を従属変数とした場合も、BDIの場合と同様に、PLEにおいて男女間で差異が見られた。

全体としてみると、ネガティブライフイベントに関しては、男女ともに類似の結果が得られたといえる。対人・達成両領域は抑鬱症状の予測に寄与しており、中でも、対人領域のネガティブライフイベントの効果が大きい。また、自尊心を従属変数とした場合も、対人領域の寄与の方が大きくなっている。このことから、男女ともに、対人領域のネガティブライフイベントが、精神的健康に大きく関わってくると考えられる。

それに対し、ポジティブライフイベントは、男女で異なる結果が得られた。男性では、対人領域のPLEが、女性では、達成領域のPLEが、それぞれ抑鬱症状と自尊心を有意に予測していた。これは、精神的健康に対する説明変数として有効なポジティブライフイベントの領域が、男女間で異なる可能性を示唆するものである。ネガティブライフイベントに比べ、ポジティブライフイベントと精神的健康の関連を扱った研究は少ない。また、精神的健康とポジティブイベントの影響を検討しているいくつかの研究においても、対人・達成領域別、男女別の分析は行われていない (e.g., Edelman, Ahrens, & Haaga, 1994; Needles & Abramson, 1990)。しかし、今回の結果から、ポジティブライフイベントが抑鬱に及ぼす影響を検討する場合には、領域と性別の問題を考慮することが重要であると考えられる。

#### 全体的考察

本研究の目的は、大学生の達成・対人領域別にライフイベントを測定できる尺度を作成し、その妥当性を検討することであった。そこで本研究では、調査1と2により、作成したライフイベント尺度と他の4種類の尺度との相関を求めた。

NLEは抑鬱の悪化に影響すると考えられているため、抑鬱を測定するSDS、BDIとの間に有意な正の相関がみられたのは予測どおりの結果である。また、PLEは、抑鬱の改善に影響すると考えられているので、両変数との間に有意な負の相関がみられたのも予測に一致する結果である。

さらに、NLEは主観的幸福感や自尊心の低下に影響すると考えられている。よって、人生に対する肯定的評価尺度や自尊心尺度との間に有意な負の相関がみられたのは予想に一致する結果である。また、PLEは、主観的幸福感や自尊心の向上に影響すると考えられているので、それらの変数との間に有意な（あるいは有意傾向の）相関がみられたのも予想に一致する結果である。

以上の結果から、今回作成した「対人・達成領域別ライフイベント尺度」の妥当性はほぼ満足の行く水準に達しており、実際の使用にも耐えうる尺度であると思われる。また、尺度の利便性を考え作成された短縮版尺度と4種類の尺度（SDS、BDI、人生に対する肯定的評価尺度、自尊心尺度）との間にも有意な相関がみられており、短縮版尺度の妥当性も高いと思われる。

なお、今回の調査では、ライフイベントが個人に及ぼす影響の強さに、男女差が存在している可能性が示唆された。重回帰分析の結果、男性の場合、達成領域のポジティブライフイベントを経験することは、抑鬱症状の悪化にも自尊心の高揚にも関連していなかった。しかし、女性では、対人領域のポジティブライフイベントの経験が、BDI、自尊心尺度得点を有意に予測していなかった。これらの結果は、個人の精神的な健康状態とライフイベントの関係を検討するとき、性差と領域の問題を考慮することの重要性を示唆するものと考えられる。特定領域のポジティブライフイベントが個人に及ぼす影響については、さらなる検討が必要だと思われる。

また、性差だけでなく、年齢や社会的な立場の違いなどによっても、ライフイベントの領域が個人に及ぼす影響は異なってくる可能性がある。本尺度は対象者を大学生に限定しているが、今後は、大学生とは異なる層の対象者に対しても同様の検討を行っていくことが重要であると思われる。

#### 引用文献

- Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. (1989) Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. *Psychological Review*, *96*, 358-372.
- Beck, A. T. (1983) Cognitive therapy of depression: New perspectives. In P. J. Clayton & E. Barret (Eds.), *Treatment of depression: Old controversies and new approaches* (pp. 265-

- 290). Raven Press.
- Beck, A. T. & Rush, A. J. (1978) Cognitive approaches to depression and suicide. In G. Serban (Ed.), *Cognitive defects in the development of mental illness* (pp. 235-257). Guilford Press.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979) *Cognitive therapy and depression*. Guilford Press.
- Blatt, S. J., D'Afflitti, J. P., & Quinlan, D. M. (1976) Experiences of depression in normal young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, **85**, 383-389.
- Brown, G. W. & Harris, T. (1978) *Social origins of depression*. Free Press.
- Coyne, J. C. & Whiffen, V. E. (1994) Issues in personality as diathesis for depression: The case of sociotropy-dependency and autonomy-self-criticism. *Psychological Bulletin*, **118**, 358-378.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Greffin, S. (1985) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.
- Edeleman, R. E., Ahrens, A. H. & Haaga, D. A. F. (1994) Inferences about the self, attributions, and overgeneralization as predictors of recovery from dysphoria. *Cognitive Therapy and Research*, **18**, 551-566.
- 林 潔・瀧本孝雄 (1991) Beck depression inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- 久田 満・丹羽郁夫 (1990) 大学生の生活ストレスサー測定に関する研究 慶応大学社会学研究科紀要, **27**, 45-55.
- 福田一彦・小林重彦 (1973) 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Lakey, B. & Ross, L. T. (1994) Dependency and self-criticism as moderators of interpersonal and achievement stress: The role of initial dysphoria. *Cognitive Theory and Research*, **18**, 581-599.
- Lewinsohn, P. M. & Libet, J. (1972) Pleasant events, activity schedules, and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **79**, 291-295.
- Needles, D. J. & Abramson, L. Y. (1990) Positive life events, attributional style, and hopefulness: Testing a model of recovery from depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **99**, 156-165.
- 尾関友佳子 (1990) 大学生のストレス自己評価尺度 久留米大学大学院紀要比較文化研究, **1**, 9-32.
- 尾関友佳子 (1993) 大学生用ストレス自己評価尺度の改定: トランスアクションナルな分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114.
- Saxe, L. L. & Abramson, L. Y., 1987, *The life events scale*. Unpublished manuscript.
- 角野善司 (1995) 人生に対する肯定的評価尺度の作成 (1) 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 95.
- Robins, C. J. & Block, P. (1988) Personality vulnerability, life events, and depressive symptoms: A test of a specific interactional model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 847-852.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- Segal, Z. V., Shaw, B. F., Vella, D. D., & Katz, R. (1992) Cognitive and life stress predictors of relapse in remitted unipolar depressed patients: Test of the congruency hypothesis. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 26-36.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- Zung, W. W. K. (1965) A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.
- (1997年1月23日受稿, 1998年3月24日掲載決定)